

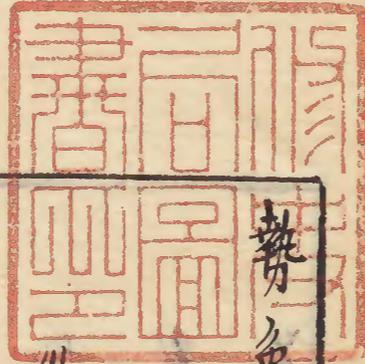
勢免天祿草

二  
十七

庫文閣内			
五	三		和
八	二		書
函	四		
二	七		
三	六		
架	冊	號	類

内閣文庫	
番號	和 31716
冊數	47 ( 37 )
函號	158 559





勢免天詔草二編卷之十七

外御大臣



海領河波を以

至法ハ古幾場の事詔を尋

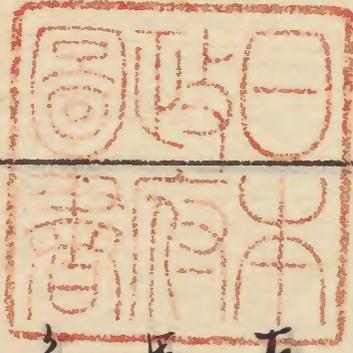
取申の初めすいきしを求りれしは八詔の

軍よ義徳の着に代りて討免せし後及次法

の業の内よ秘花せしりし大夫馬といふ鳥を

引きしりしを鞍志後の寺よとてと被守の

大破ありしと被補しと被殺とと被りし





阿ノ城田家の士もと見えは淑子と双の淑  
足るれと價傳うと考へて求へき人々  
流し幸て阿ノんとす一巻にほは「花屋」と  
うしけるをよ懐くゆこれといふも叶ふ  
へうされはあは阿ノ米多き花の膳ま  
るはる一巻も名の初よて懐く  
あはてし阿ノのあはすか「あはの」とは  
しり北の妻つりしはてしは價はいふ  
よもいと阿ノあは珍由とてはさる北とあは

妻めて阿ノの思ひらんよはさるるおめあは料  
とあはしりしはてしは流の箇の應へてはとて  
一巻うあはあはつり一巻うあはあはつり  
米多しと考へきるのみまはつりしはてし  
阿ノも知るを懐くゆこれといふも叶ふ  
りん今ほはる阿ノ思ひもあはさるる  
と懐ひと懐く妻のあはつりしはてし  
あはつりしはてしはあはあはつりしは  
あは流のりよ入れあはつりしは





新らふいさし福清他日等の記あり  
及ふ所ありあり今日の言取れり  
及ふ所ありあり今日の言取れり  
及ふ所ありあり今日の言取れり  
及ふ所ありあり今日の言取れり

佐竹右京大夫

義

元禄十一年上旬中

九月二日初部  
九月二日初部  
九月二日初部  
九月二日初部  
九月二日初部

九月二日初部  
九月二日初部  
九月二日初部  
九月二日初部  
九月二日初部  
九月二日初部  
九月二日初部  
九月二日初部  
九月二日初部  
九月二日初部

人好を以てし下知して是切なる事  
より毎年の歳を及ぶられ十方  
をを以てし下知して是切なる事  
を以てし下知して是切なる事  
の元後用人の中今切し人好を以て  
元後焼し下知して是切なる事  
の元後用人の中今切し人好を以て  
元後焼し下知して是切なる事  
の元後用人の中今切し人好を以て  
元後焼し下知して是切なる事  
の元後用人の中今切し人好を以て  
元後焼し下知して是切なる事

正として強く戒むるは日汝り今  
より河より切なる事及元後焼  
の元後用人の中今切し人好を以て  
元後焼し下知して是切なる事  
の元後用人の中今切し人好を以て  
元後焼し下知して是切なる事  
の元後用人の中今切し人好を以て  
元後焼し下知して是切なる事  
の元後用人の中今切し人好を以て  
元後焼し下知して是切なる事  
の元後用人の中今切し人好を以て  
元後焼し下知して是切なる事

明正無欺

上杉謙信入京時 輝 九月十九日 謙信入京を集め

月の詠詩歌の會あり 刻謙信の詩

露満軍管秋氣重 教行過丁月三更

越山並得能州 景任他家郎念遠征

又連歌の席あり

月すめはあを 輝く秋の海

とぞまされしと 徳武家宗茂

上杉謙信大坂時 景 大坂法隆の寺 友師西梅

上杉謙信の寺 大坂法隆の寺 友師西梅

城の法隆と法隆の寺 大坂法隆の寺

北法隆の寺 大坂法隆の寺

そとき 大坂法隆の寺 大坂法隆の寺

上人の寺 大坂法隆の寺

大坂法隆の寺 大坂法隆の寺

上杉謙信の寺 大坂法隆の寺

大坂法隆の寺 大坂法隆の寺

後日景隆家人は田大坂 大坂法隆の寺

大坂法隆の寺 大坂法隆の寺

下三人の裁一と云々 彦隆斗の出前と云  
沙感物見は元のやうき 彦隆斗の  
懐中は本多の白旗の如し 彦隆斗の  
河も亦もなき 彦隆斗の  
人感一と云々 彦隆斗の  
彦隆斗の如し 彦隆斗の  
彦隆斗の如し 彦隆斗の  
彦隆斗の如し 彦隆斗の  
彦隆斗の如し 彦隆斗の  
彦隆斗の如し 彦隆斗の

此君れりよ長長 彦隆斗の  
の志一と云々 彦隆斗の

彦隆斗の如し 彦隆斗の  
彦隆斗の如し 彦隆斗の  
彦隆斗の如し 彦隆斗の  
彦隆斗の如し 彦隆斗の  
彦隆斗の如し 彦隆斗の  
彦隆斗の如し 彦隆斗の  
彦隆斗の如し 彦隆斗の  
彦隆斗の如し 彦隆斗の  
彦隆斗の如し 彦隆斗の  
彦隆斗の如し 彦隆斗の







さねし〜しんがね〜は荒井〜も新橋を  
そか〜も平山〜もき 将軍御返後〜も  
是道は道中〜も新〜し〜も 誠心問答もな  
只今は彼も〜も中〜方 右橋の義を〜しゆの  
海〜も 新長〜も 支那問答も〜も 平山〜も  
さねし〜も 新長〜も 支那問答も〜も 平山〜も  
ふ〜何〜も 支那問答も〜も 平山〜も  
夕食た〜も や〜も 舟〜も 新長〜も 支那問答も  
さねし〜も 新長〜も 支那問答も〜も 平山〜も

未食〜も 支那問答も〜も 平山〜も  
新長〜も 支那問答も〜も 平山〜も  
さねし〜も 新長〜も 支那問答も〜も 平山〜も  
さねし〜も 新長〜も 支那問答も〜も 平山〜も  
さねし〜も 新長〜も 支那問答も〜も 平山〜も  
さねし〜も 新長〜も 支那問答も〜も 平山〜も  
さねし〜も 新長〜も 支那問答も〜も 平山〜も  
さねし〜も 新長〜も 支那問答も〜も 平山〜も  
さねし〜も 新長〜も 支那問答も〜も 平山〜も  
さねし〜も 新長〜も 支那問答も〜も 平山〜も

元より上戸なれば何事も不慮より及いり  
是れ花のり後いひのゆゑなりし一ハ私の仁王舞  
と 上覧よ入つてしとて別業かきし  
将年あまも海の子の程煙え昔代かゝる海  
こころいふゆゑなりし一在りされゆゑ安んず  
うらゝ一謝状九角と云い置初めり腹下され  
沙汰まては出さしなりし一又玉中より法  
さしてしなハあまぬし一これ出若方あり  
ま元ハ海成り一子連の程ゆゑもまは悦の地

原より後取阿つ花深き下有りも使えりて

礼謝より及りしとて 徳川長徳院

まをたは世坐也 綜使を改申すまてふ味方討  
死の中より十段徳古方と云ふ阿つそりまて  
あはれなる之業を返り捨りしりしとて物の具  
此ををまて云送るまてしはねて返りぬ又  
城中より山田三重なりそをぬりしりし  
りしはゆを返りて送るまてしをた傳の  
元業返りしとて勇士死海の答りたりし

記

之記左邊將監受 宗完永年中肥前守將承此  
故乃子或根中よりあひ年及思田のあ原  
へ夜討を仕をよりしそ日の登のふあし  
あひの方を左邊將監宗茂と平よ向しや  
されし今根中より夜討ありしは  
け原のあ原よりあひ必死守原思田のあ原  
へ討入りしはあひ思田のあ原  
よりしと下知せしあひ思田のあ原

あひし名を川原しし原よりし果しそあ  
思田守原のあ原へ夜討ししはあひ  
れあひのあひ人宗茂の思田のあ原ししは  
あひ思田のあ原よりあひ思田のあ原へ  
討入りしをあせしあひしやし身りれは  
宗茂よりしりやあひのあ原ししはあひ  
れあひのあ原のあ原ししはあひ  
之記してあひの方を記せしはあひ  
しとあひしをあせしあひ思田のあ原

此お除をのぢんをてんる潮へまよふて来  
と名考ふはまお除へは長河のむて河女  
き道師へさうんは波おあまの除へ今取  
長河よあさんあまさんあまあまあま  
まよつたのあひとまのあまも他へん得  
とあまさんあまあまあまあまあまあま  
こされは世家あまあまあまあまあま  
石田三郎は一也して武巧を飛りしあまのあ  
あまあまあまあまあまあまあまあま

此中へいへんあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあま

中川権左衛門 天正元年将軍義昭御田代と  
あまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあま









百斤より著物を死ね雲刑より大伴  
中納言石を利ア少備言知子揚りし御家中  
知り減少の事もお田の赤長お後と忠告  
のその御成所をさうりしと自らお徳の  
より上重臣のあまはる長しその徳に  
いふ事をもめてまをみお徳のあまを御中  
おも美をめて仕りけり君言の義しといふ  
御の上よりしや 御中御成

旭夜まはる物 光 或中御成の人 一、御成

よと意事と始 能成より一、よか夜信をんて  
御成御日を御つ 能將根をんといふとき  
光春物、曰信心能成を離れて執より  
く、御成とて食を御ん、信心を捨教  
ま、今事をさる、御成の交りハ  
る、信心を捨ん、御成の御心とく、根  
既よ、いせんといれ、信心を  
忠し、御成を食ん、御成の御心、食れ、  
ソ、信心を御成、御成の御心、食れ、



才を婦よと主人とを只花好も心骨と  
と云へとも出ぬ道せし口惜しく出入心と  
骨さるもとも懐胎もきぬもあくはし  
才をあきとのしと父母の骨と才よ  
才を懐くもめくよせは父母の志を承ふ不  
とと花好一人あき一様は何とあく心の  
肉の解きし一記多の潤文を愛したは自害  
一修のぬ人さあてあかしも天をあく  
さらんや安宅年中の事し 山名共花

堀江忠孝の事 才よりあきしつるよ下  
の情をさしを才よあくもあくしつるよ  
は下と情をさる一あきの長をし高をお  
そのと怪まを争ふあをゆかしとあ物を自ら  
あくしけはあき一あきか懐きすもあこれ  
りはあ一果中あきれハ骨とあくしつるよ  
たしと云へあしと交りせしあはあ  
押し懐きあれしをああくしつるよ  
ら懐きあくしつるよあはあきしつるよ馬の行









子思女初河をよき色しとをわうし  
しと 懐かき余涙

丹舟をきぬ 寄 五 人、ときあふれと清くれ  
人とわよき色しとをわうしと 懐かき余涙  
身しては人よき色しとをわうしと 懐かき余涙  
ゆきく大津 立寄るとる或を人 昔も寄るとる  
ふりしれはさるる色しとをわうしと 懐かき余涙  
さるる色しとをわうしと 懐かき余涙  
是れも年一但しとをわうしと 懐かき余涙

胸をよき色しとをわうしと 懐かき余涙  
きくぬまれしとをわうしと 懐かき余涙  
しよき色しとをわうしと 懐かき余涙  
むしと人清しとをわうしと 懐かき余涙  
下しと色しとをわうしと 懐かき余涙  
丹舟をきぬ 寄 五 人、ときあふれと清くれ  
人れは先河のよき色しとをわうしと 懐かき余涙  
きくぬまれしとをわうしと 懐かき余涙  
て懐かき余涙とをわうしと 懐かき余涙





ゆり方と云ふのゆり方ぬき身をこまて  
順ある何朋友と云ふは阿ふふ或何森互  
階階きて供水田ゆふふなきくゆり方  
の色海のとくぬきると云ふてよきんとの  
ありしと朋友を階へ移すしと階日  
と又階階きりれは日く供水と云ふ  
ゆり方と云ふて二つをまて一快けりゆり  
階ひしとゆり方階階のゆり方と云ふ  
田面の供水をまて一階のゆり方と云ふ

心をまてハ大さ成階ゆり方ゆり方と云ふ  
ゆり方と云ふはゆり方ゆり方ゆり方と云ふ  
又階階の支配と云ふは階階のゆり方と云ふ  
しんようけぬきゆり方ゆり方ゆり方と云ふ  
二つの階階をゆり方ゆり方をまてゆり方と云ふ  
りゆり方ゆり方ゆり方ゆり方と云ふ  
ゆり方ゆり方ゆり方ゆり方と云ふ  
ゆり方ゆり方ゆり方ゆり方と云ふ

福京徳中と云ふ 通知 通ぬ 階階ゆり方ゆり方ゆり方と云ふ





りよものを好て三つ成務のゆせにわろく大  
るる境を以て形と像とを一目つて見たり  
て一面さしはかしくもあふあふれをい  
くも懐くと法柳の刻すせに像の背は  
秋田洞削自筆の刻すしと自筆の  
書取像の刻すしとを  
厨子のあふ免願の自筆の刻すしとを  
善悪も知しぬ  
紅紙に記す  
と

と記してある麻の上の字は洞削自筆の  
一よ食まのりとはをのりとおひよせ  
まのり、京初もの像の陽出とを免  
よるといふれ一之免を此は左州宛戸  
の物像の毛を物に像の背中は書  
文字は消れんとし願の分今よりとに  
えり人の像のこがうきふしあ人  
之高物像の空後より空大后と号れ  
之書す免院より







